
退職する先生方からのメッセージ

雑感：25年を振り返って

宮城 好郎

1. はじめに

今回退職にあたり原稿執筆の機会を頂きましたので、県立大での25年間の小括してみたいと思います。

2. 岩手県立大学へ

本学が開学した25年前、私は本学での辞令交付式に緊張しながら臨みながらこれまでのことを考えていました。前職は山形県のS短大でした。私学の小規模な地方の短大でしたが、その分学生との距離も近く、一人ひとりと向き合い、とことん付き合うことができました。時にはゼミ生が私の研究室に居座り「おしゃべりの場」となり、なかなか自分の仕事や研究に打ち込めなくなる事態もしばしばでした。そのころ、私は短大の学生寮に住んでおり、学生委員会の教員として寮生の寮生活全般における指導と個別の相談、さらに寮の維持管理など、学内の雑務に翻弄される日々を送っていました。それでも、研究室があり、専任講師の職が得られたことに満足していたのでした。

平成10年、山形県から盛岡市の松園教員住宅に移り住みことになりました。入学式では、4学部合わせて1期生479名が入学し、私の県立大学での教員生活もスタートしました。専任講師である私が最初に担当したのは、社会福祉学部の学生を対象にした「学の世界入門Ⅰ」でした。彼ら、彼女らは飲み込みも良く授業での質疑応答にも手ごたえがありました。S短大で悩まされた私語や、授業中に机に突っ伏している学生などは皆無でした。本学の社会福祉学部は他大学に比べても専任教員が多いと思います。教員数の多さは、教員一人当たりの雑務が軽減されるということになります。研究費も潤沢で、当初は年間100万円近くあり、20万円だったS短大とは比較になりませんでした。

3. ゼミナール

宮城ゼミは、1期生K君、Tさん、Iさんの3名のゼミ生でスタートしました。先輩もいないなか、試行錯誤しながら、卒業課題研究の研究テーマを決めて優れた論文を執筆されました。1期生のゼミをはじめ、ゼミOG・OBと卒業後も交流を深めています。今振り返

てみると、最初はゼミ生を導くのが教員としての私の役割と考えていました。しかし、実はその逆であり、ゼミ生たちが今の私を育ててくれました。25年の中で多くの素敵なゼミ生たちとの出会いが財産となっています。毎週顔を合わせてきたゼミ生たちの顔を思い浮かべると、なんだか感慨深い気持ちになります。もっとしっかり指導すべきだったという反省の念も、フツフツとわいてきますが、ゼミ生の知的・人間的成長を祝福し、今後も逞しく生き抜いていくことを願っています。

3. 大学教員の仕事

大学教員の仕事はよく「教育」と「研究」と言われていますが、実際には学校運営に関する業務、たとえば就職支援、学生の生活指導、入試や受験生確保のためのイベントに割く時間が意外に多くなります。大学教員の仕事の面白さという点では、教育者として卒業生が社会に出て活躍するのを見るのが楽しみであり、大変うれしいものです。

4. おわりに

本学部での最後の8年間は、前から尊敬していた当時学部長の狩野徹先生に声をかけていただき、学科長として、学部運営の一端を担うようになりました。力量不足などでお役に立てなかった点多々ありますが、狩野徹先生をはじめ、桐田隆博先生、高橋聡先生、三上邦彦先生、中谷敬明先生のお導きでなんとか乗り切ることができました。お世話になりました大学・学部の教職員、県プロ研修係の皆様には感謝を申し上げます。また、私のような者を「先生」と呼んでくれた卒業生・ゼミ生・キブラボの皆さんにも感謝いたします。良き環境、良き学生に恵まれたとつくづく思います。定年になっても、人生のテーマを見つけて永遠に成長したいと思っています。長い間ありがとうございました。